

## 使徒の働き19章8-40節 「全アジアへの宣教」

### 1A パウロ宣教の集大成 8-20

1B アジア中に広がる主の言葉 8-10

2B 驚くべき力ある業 11-20

1C 悪霊に懲らしめられる祈禱師 11-16

2C 魔術の遺棄 17-20

### 2A 宣教の分岐点 21-40

1B ローマを見据えた旅 21-22

2B エペソ宣教を終わらせた騒動 23-40

1C 経済的損失 23-28

2C 反ユダヤの騒乱 29-34

3C 常識的な調停 35-40

## 本文

使徒の働き 19 章です。午前礼拝で、1-7 節まで見てきましたので、8 節から見て行きたいと思います。パウロが、ギリシアのアカイア地方にあるコリントで二年近く滞在しましたが、今、第三次宣教旅行でアジア州の首都、エペソまで来ました。ここには、二年三か月以上、20 章ではパウロは三年と言っています(20:31)。最も長期に渡った宣教であるだけでなく、最も御言葉が広がり、最も大きな驚くべき業が行われたところであり、後のキリスト教の歴史にも多大な影響を与える働きとなります。ある注解には、パウロの宣教活動の「集大成」と呼んでいます。

私たちは、1-7 節でその先駆けとなるパウロの働きを見ました。すでに弟子となっている者たちが聖霊をまだ受けていないことに気づき、手を置いたら聖霊が与えられ、彼らは異言で語ったり、預言を語ったりしました。

エペソの町ですが、西トルコのエーゲ海沿岸にあります。ローマ時代、ここがアジアからの貿易をしている人々、隊商の終着地点であり、またローマからアジアに行くための上陸地点でありました。私たちには、どうしてもトルコはあまりイメージがわからないかもしれませんが、古代からの悠久の歴史を持っており、東西文明の十字路と呼ばれていました。西方世界から東方世界へ、東方世界から西方世界へ、行き来するところだったので、エペソはそれを象徴していました。

紀元前 11 世紀頃から、ギリシア系のイオニア人の植民地になり、紀元前 6 世紀に、リュディア王国という西トルコの王国が支配して、黄金を極めました。その時に、その王クロイソスがアルテミス神殿を建てました。途中で放火によって焼け落ちましたが、さらに荘厳な物に建て替えて、アテネ

のパルテノン神殿よりも四倍大きかったと言われます。紀元前 4 世紀にアレクサンドロス大王によって、ヘレニズムの世界に組み込まれました。途中で紀元前 113 年に、ローマの支配下に入りアジア州の首都となります。政治、経済、そして宗教の中心地となっていきます。パウロがここを訪れた時は、野外劇場の拡張工事が行われたり、エペソが急速に発展していた時でした。私は、ここを二度訪れましたが、その遺跡の広さと大きさに圧倒されました。それまでは、イスラエルやヨルダンにあるローマの遺跡しか見たことがなかったのですが、いかにイスラエルがローマの辺境であったかを知らされました。

### 1A パウロ宣教の集大成 8-20

#### 1B アジア中に広がる主の言葉 8-10

<sup>8</sup> パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努めた。<sup>9</sup> しかし、ある者たちが心を頑なにしてお聞き入れず、会衆の前でこの道のことを悪く言ったので、パウロは彼らから離れ、弟子たちも退かせて、毎日ティラノの講堂で論じた。

ディアスポラのユダヤ人が、エペソの町には多く住んでいました。前回、私たちはパウロが短期間、会堂に入ってユダヤ人たちと論じ合ったら、もっと長くどまるように頼んだとありました。エペソは、いろいろな人々の集まる国際的な都市だったので、ユダヤ人の考え方も寛容だったのでしょう。テサロニケのユダヤ人のことを考えれば、対照的です。ちょうど、東京に住んでいる人が、他から来た人々や、外から来た考えに比較的寛容であるのと似ています。ですから、三か月の間、パウロは会堂で論じることができました。

内容は、「神の国について」です。福音書から、神の国の福音と呼ばれていました。神が王となって支配される世界です。ユダヤ人はメシアが来られて、神の国を建てられると信じていました。それで、イエス様は復活後に、弟子たちにモーセの律法から預言者、詩篇など、聖書全体を通して、メシアはまず苦しみを受け、それから栄光に入るということを説き明かされました。使徒たちは、聖霊が降ってからそのことを熱心に語っています。ペテロの五旬節の時の説教もそうですね。イエスを神がよみがえらせて、今は神の右の座に着いておられ、やがて戻ってきて、万物を回復されると説きました。

私たちにとっても同じです。イエス様が、私たちの罪のために死なれ、三日目によみがえり、この方を主として受け入れるならば、御霊が与えられます。神の国を御霊によって知ることが許されています。神の平安、神の愛、聖霊の喜びなど、神の国にしかない祝福が与えられています。そして、イエス様が地上に戻って来られて、目で見える形で神の国が臨むのです。ユダヤ人にとっては、目に見える、メシアが王となった神の国を待ち望んでいたのですが、それが、私たちの為の罪のために死なれ、よみがえったイエスを信じることによって、入ることができると説いたのでしょう。

ところが、三か月経ってから、心を頑なにする人々が現れました。素直に証拠を見るならば、確かにイエスがキリストであると知ることができますが、それを拒みました。そうすると、「会衆の前でこの道のことを悪く言った」とあります。使徒たちの時代は、キリスト教はキリスト教と呼ばれず、「この道」と呼ばれていました。悪く言ったので、パウロはここにいることをやめたのです。コリントにおいてもそうでしたね、いや、もっと強い言葉で冒瀆的なことを言ったのだと思います。「18:5 彼らが反抗して口汚くののした」とあります。罵る、また冒瀆的なことを言うのは、神にとって、「はい、これで終わり！」と言わせるものです、重い罪です。パウロは、弟子たちも共に退かせて、その場を去りました。弟子たちにも良くないと判断したのでしょう。コリントの時と同じように、「18:6 私には責任がない。今からは私は異邦人のところに行く。」という思いだったに違いありません。

そして場所は、「ティラノの講堂」に移します。ギリシア人のティラノという人が所有している講堂でしょう。エペソの遺跡では、船着き場から真っ直ぐ、野外劇場につながる商店街があり、アルカディアン通りと呼びます。その一角にあったと言われています。ある写本には、午前 11 時から 4 時までと書いているそうです。つまり、パウロはコリントの時と同じように天幕作りなどの仕事をしながら、そのお昼と昼下がりのお休みの時間を使って、論じていたと考えられます。

<sup>10</sup> これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。

これがすごいことです。二年の間に、アジアに住む人々がみな、ユダヤ人だけでなく、ギリシア人だけでなく、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いたのです。エペソは、先に申し上げた通り、アジアの終着地点であり、ローマにとってはアジアへの上陸地点です。ですから、ここで主のことばを聞いた人々が他のアジア州の地域に広げて行ったのです。そのために、多くの教会が建てられました。エペソから西に約 200 キロメートルのところにはコロサイ、ラオディキア、ヒエラポリスがあります。コロサイ人への手紙に、これらの町の名が出てきます。そして、黙示録の七つの教会はみな、アジアにある教会です。一気に広がりました。

そして、後に、黙示録を書き記したヨハネが、エペソを拠点とします。彼の墓はここにあります。ですから、ヨハネの弟子たちもアジアに多く行き来して、紀元後四世紀までローマの迫害の中に生きましたが、皇帝コンスタンティヌスがキリスト教を公認にしました。そしてローマ帝国の首都をローマから、コンスタンティノープルに移しました。今のトルコの最大都市、イスタンブールです。そして、今のトルコにある、当時、東ローマ帝国の中で、数々の公会議を教会が開きました。キリストについての教理について、議論した会議です。ちょうど、使徒たちがエルサレムで、異邦人がそのまま救われるのかどうかを議論した会議のように、キリストが誰なのか、三位一体について、いろいろな議論があったので、その公会議で決着をつけたのです。初めはニカイアというところ、次に、コンスタンティノープル、そしてエフェソ、そうですここエペソでも公会議があり、そしてカルケドンとい

う、これも今のトルコの中にある町で公会議が行われました。ですから、ここ 19 章でのパウロの働きは、後の東方の教会の歴史を決定づける宣教だったと言えます。

## 2B 驚くべき力ある業 11-20

### 1C 悪霊に懲らしめられる祈禱師 11-16

<sup>11</sup> 神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた。

主は、御言葉を語られて、その確かさを示すために奇跡を行われました。中風の男の癒しがそうでした。罪の赦しの権威があることを示すために、男を癒やされました。そして、マルコの福音書の最後は、こうなっています。「16:20b 主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」それで、使徒の働きは、主のことばを語り、論じ合い、説得しようとしている使徒たちの姿と共に、その言葉を確かなものとする、大きなしるしが伴っています。

<sup>12</sup> 彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほどであった。

パウロが、天幕づくりをしていた手拭いや前掛けであったのでしょう。それを持って行っただけで、病人が癒され、また悪霊も出て行くとは、すごいことです。以前、ペテロがエルサレムで通りを歩いている時に、似たようなことが起こりました。「5:15 そしてついには、病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせて、ペテロが通りかかるときには、せめてその影だけでも、病人のだれかにかかるようにするほどになった。」

癒しの賜物は信仰によって働きます。つまり、手拭いや前掛けそのものに癒しの力が働いているのではなく、病人がパウロのところまで行けない、けれども、パウロを通して神が働いておられる、だからせめて手拭いや前掛けでも、という思いで持っていたのでしょう。彼らの中に、信仰が働いていたのです。

<sup>13</sup> ところが、ユダヤ人の巡回祈禱師のうちの何人かが、悪霊につかれている人たちに向かって、試しに主イエスの名を唱え、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言ってみた。<sup>14</sup> このようなことをしていたのは、ユダヤ人の祭司長スケワという人の七人の息子たちであった。<sup>15</sup> すると、悪霊が彼らに答えた。「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。しかし、おまえたちは何者だ。」<sup>16</sup> そして、悪霊につかれている人が彼らに飛びかかり、皆を押さえつけ、打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家から逃げ出した。

すごいことが起こりました。いろいろな意味ですごいですが、まず、エペソは政治、経済が発達したところですが、偶像礼拝も盛んです。アルテミス礼拝を筆頭に、いろいろな神々が拝まれている

した。皇帝礼拝も盛んでした。そして魔術も多く行われていたのです。ですから、ここで起こった出来事は、見た人々にとっては非常に大きな衝撃となって伝わりました。

ユダヤ人であるパウロを通しての悪霊追い出しだったので、ユダヤ人の巡回祈禱師が興味を持ちました。ユダヤ人の中でも、悪霊追い出しは行われていました。イエス様も言及したことがあります(マタイ 12:27)。そして、魔術を行う者たちがいました。以前、第一次宣教旅行の時、キプロス島のパポスにおいて、魔術師エリマがいて、彼はバルイエスという名の偽預言者でした(13:6)。ここでは、これだけ大きな業を行うパウロというのは、一体なんだろう？と好奇心を持って、試しに「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言ってみたのです。そして、こともあることか、彼らは、「ユダヤ人の祭司長スケワという人の七人の息子たち」とあります。注解書を見ますと、祭司長とは自称しているだけで、鍵括弧を付けたほうがいいともありました。

しかし、悪霊の言い草がすごいです。「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。しかし、おまえたちは何者だ。」そうです、覚えているでしょうか、悪霊はイエス様のことを知っていました。カペナウムの会堂で教えておられた時に、悪霊が叫んで、「私はあなたがどなたなのかを知っています。神の聖者です。」と言いました(マルコ 1:24)。そしてパウロのことも知っています。ここで思い出すのが、イエス様の山上の説教における警告です。「マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」試しにやってみる、という類の者ではないのです。イエス様を人格的に知っているかどうか？なのです。

## 2C 魔術の遺棄 17-20

<sup>17</sup> このことが、エペソに住むユダヤ人とギリシア人のすべてに知れ渡ったので、みな恐れを抱き、主イエスの名をあがめるようになった。

主は時に、このような聖なる裁きの働きをされます。それによって、かえって人々が恐れを抱いて、御名をあがめるようになります。ペテロが、アナニアとサツピラが聖霊に逆らったと宣言した時に死んでしまいました。その時、「5:11 教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。」とあります。そして、黙示録 11 章で、エルサレムに二人の証人が現れ、反キリストに殺される者の、三日後に生き返り、天に昇りましたが、その時に、「11:13 大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。」とあります。そして、「残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。」とあります。

<sup>18</sup> そして、信仰に入った人たちが大勢やって来て、自分たちのしていた行為を告白し、明らかにした。<sup>19</sup> また魔術を行っていた者たちが多数、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を合計すると、銀貨五万枚になった。

驚くことに、信仰に既に入っている人が、魔術を行っていたのです。それほど、エペソでは魔術が慣習的に行われていて、信仰を持っていても離れられていなかったのです。しかし、この出来事によって、健全な恐れが生まれ、自分のしてきた行為を告白し、明らかにしたのです。罪を告白し、明らかにするところには、聖霊による清めと、霊的復興、リバイバルが起こります。魔術は、秘儀とも言われるように、人々に知られないで密かに行っているからこそ意義があります。それを、衆人の前に持ってくるということは、それだけで魔術の効力をなくす行為です。

そして、銀貨五万枚は半端ないです。銀貨一枚が一日分の労賃に値するので、五万枚ですから五万日分の労賃です。一枚を一万円にするならば、五億円に相当します。ここまで魔術にはまるのも何ですが、これだけの高額のものを購入できていたというのもすごいです。エペソ人への手紙を一度、読んでみてください。そこには、キリスト者にある富について語っています。いかに天において、霊的祝福をもって祝福されているかをパウロは語っています。富の多いエペソで、まことの富について語りました。さらに、キリストが、あらゆる霊的勢力よりも偉大であることを強調されています。「1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、21 すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

<sup>20</sup> こうして、主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった。

そうです、主のことばが広がるだけでなく、力強く広まりました。そして勢いを得ています。

## **2A 宣教の分岐点 21-40**

その中で大きな分岐点を迎えます。御霊がパウロに、次の宣教計画を示されるのです。彼のアジアとギリシアにおける働きは、十分に行えました。パウロの宣教の働きは、二つに絞られてきます。エルサレムに行って、それからローマに行くというものです。

### **1B ローマを見据えた旅 21-22**

<sup>21</sup> これらのことがあった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通してエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

彼が再び、マケドニアとアカイアを通るのは、最終的にはエルサレムに行くためです。もちろん、そこにある諸教会をかつげることもあります。彼の手紙を見ますと、エルサレムにいる貧しい兄

弟たちを助けるためであります。飢饉が起こった時、シリアのアンティオキアの教会がユダヤの教会に援助を送ったように、異邦人主体の教会が援助することによってキリストの体の一致を具体的に示そうとしたのです(ローマ 15:25-27)。

そしてその後に、ローマに行くことを彼は計画しました。御霊の導きもありますが、彼の決意がここには含まれています。これから、パウロがアカイアのコリントのところまで行った時に、ローマ人への手紙を書きました。そこで、ローマに福音を伝えたいとするパウロの強い思いが書かれています(1:15)。コリントまで来て、そこからローマに行きたいと思っていたけれども、いろいろなことで妨げられました。けれども、パウロが働くべき所もなくなってきたので、ローマにおいては立ちよって、彼らによって遣わされて、イスパニア、すなわちスペインに行きたいということを、手紙の 15 章で述べています。けれども、聖徒たちのための奉仕をするため、エルサレムに行くと言っています。主に祈りながら、御霊の示しを受け、計画を良く立てているパウロの思いが伝わってきます。

みなさんにも、将来における長期的な計画というものを立てたことがあるかと思います。計画を立てること自体は悪いことではありません。主が志を私たちに与え、それを持って計画をすることは御心になっっています。その過程で、主が導いて下さり、自分の予期しない方法で、その目標が達成されることがあります。パウロのこれからの人生はそういったものになります。

<sup>22</sup> そこで、自分に仕えている者たちのうちの二人、テモテとエラストをマケドニアに遣わし、自分自身はなおしばらくアジアにとどまっていた。

二人を遣わすのは、前もって献金の準備をしておくように伝えるためです。それからパウロが行き、お金を集める予定だったようです。テモテは、リステラから加わった、パウロにとっての信仰の息子になった人ですが、エラストは、コリントの町の会計係の人でした。「ロマ 16:23 私と教会全体の家主であるガイオも、あなたがたによろしくと言っています。市の会計係エラストと兄弟クアルトもよろしくと言っています。」お金を扱っていた専門家ですから、献金を集めることにおいてはふさわしい人物だったに、違いありません。ここで、すばらしい遺跡の発見があります。コリントの遺跡を見学に行った時、広場の一部の地面の石の板に、彼の名が刻まれているものが発見されたのです！私もその石板を見ることが出来ました。

そして、パウロはアジアに留まることを決めています。コリント人への手紙はパウロがエペソにいた時に書いていますが、第一の手紙にこう書いています。「16:8-9 しかし、五旬節まではエペソに滞在します。実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています。反対者も大勢いるからです。」反対が多いけれども、実り多い働きをもたらす門が開かれていたのです。けれども、パウロが最終的にエペソを離れる出来事が起こります。それが野外劇場での騒動です。

## 2B エペソ宣教を終わらせた騒動 23-40

### 1C 経済的損失 23-28

<sup>23</sup> そのころ、この道のことで、大変な騒ぎが起こった。<sup>24</sup> デメテリオという名の銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿の模型を造り、職人たちにかなりの収入を得させていたが、<sup>25</sup> その職人たちや同業の者たちを集めて、こう言ったのである。「皆さん。ご承知のとおり、私たちが繁盛しているのはこの仕事のおかげです。<sup>26</sup> ところが、見聞きしているように、あのパウロが、手で造った物は神ではないと言って、エペソだけでなく、アジアのほぼ全域にわたって、大勢の人々を説き伏せ、迷わせてしまいました。<sup>27</sup> これでは、私たちの仕事の評判が悪くなる恐れがあるばかりか、偉大な女神アルテミスの神殿も軽んじられ、全アジア、全世界が拝むこの女神のご威光さえも失われそうです。」<sup>28</sup> これを聞くと彼らは激しく怒り、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と叫び始めた。

パウロを通しての、驚くべき力強い働きによって、アルテミス神殿の模型を買う人々が激減しました。以前、ピリピにおいても、占いの霊をパウロが追い出したので、それで金儲けができないことを主人が知って、それでパウロとシラスを役人の前に引きずり出しました。ここでは、その規模をはるかに上回る、銀細工人たちの組合みたいな人たちが、商売あがったりになったので、抗議行動に出たのです。

福音がこれだけの、エペソ社会に変革をもたらしたということです。私たちは、社会活動において、ここから大きな知恵を得ます。それは、福音が社会を変えるのであり、社会を変える自体を目的にしている世における活動とは別だということです。社会に関わって、その中で主の証しを立てるといことはすばらしいのですが、社会が悪いからそれを変えるというのは、間違っています。パウロは、アルテミス神殿を倒す運動はしませんでした。福音を語り、人々が魔術や偶像礼拝をやめていったのです。それで、アルテミス神殿に行く人々が少なくなっていったのです。

アルテミス神殿は、先に少し説明しましたが、アルテミスという女神を祀っているところです。元々、ギリシア神話に出て来る神ですが、先に話したようにエペソは西洋と東洋の分岐点のようなところです。ギリシア神話のアルテミスを、アジアに古代からあった地母神と言われる、豊満な裸体の女性、多産の女性と融合しています。それで、エペソのアルテミスは、多数の乳房を持っている像です。その中で、儀式の中で人々の前で去勢する儀式があり、女祭司として働きます。そして、人々を乱交パーティーのような儀式へ導き、荒々しい音楽、踊りをさせ、飲酒が伴っていました。人々をエクスタシーの中に入れるためです。恐ろしい道徳的退廃です。パウロが、エペソ人への手紙で、「5:11-12 実を結ばない暗闇のわざに加わらず、むしろ、それを明るみに出さない。彼らがひそかに行っていることは、口にすると恥づかしいことだからです。」と言っています。

そして、銀細工人デメテリオが叫んでいるように、アルテミス神殿は非常に巨大で、パルテノン神殿の四倍はあったと言われ、アジア全地域、いやそれよりも広範囲に参拝客があったほどです。

彼の、「全アジア、全世界が拜むこの女神のご威光さえも失われそうです。」というのは、決して大げさではありません。

#### 2C 反ユダヤの騒乱 29-34

<sup>29</sup> そして町中が大混乱に陥り、人々はパウロの同行者である、マケドニア人ガイオとアリストアルコを捕らえ、一団となって劇場になだれ込んだ。

マケドニア人の同行者が捕らえられました。アリストアルコは、使徒 20 章 4 節で、テサロニケ人であるとあります。

<sup>30</sup> パウロはその集まった会衆の中に入って行こうとしたが、弟子たちがそうさせなかった。<sup>31</sup> パウロの友人でアジア州の高官であった人たちも、パウロに使いを送り、劇場に入らないようにと懇願した。

パウロは、その時に別の場所にいたのでしょうか。この騒動を聞いて、会衆の中に入ろうとしました。この野外劇場ですが、本当に大きいです！今も遺跡がありますが、見上げないといけません。当時、25000 人が収容できたそうです。彼は、ガイオとアリストアルコを救いたいという思いがあり、またこれを、人々に話す伝道の機会にしたのでしょうか。しかし、身の危険があります。弟子たちがそうさせませんでした。また、パウロにはアジア州の高官の友人もいたようです。劇場に入らないでほしいと懇願しています。

この時にすでに、パウロは身の危険を感じたようです。コリント人への手紙第二 1 章で、死にそうになったことを話していますが、ここの騒動のことでなかったかと言われています。「1:8-9 兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。9 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。」もう一つ、コリント第一 15 章では、「エペソで獣と戦った」とあります(32 節)。この劇場では、獣が放たれて、それを剣闘士が戦うというエンターテインメントがありました。それでエペソの獣と言ったら、この野外劇場だったのです。

<sup>32</sup> 人々は、それぞれ違ったことを叫んでいた。実際、集会は混乱状態で、大多数の人たちは、何のために集まったのかさえ知らなかった。<sup>33</sup> 群衆のうちのある者たちは、ユダヤ人たちが前に押し出したアレクサンドロに話すよう促した。そこで、彼は手振りでも静かにさせてから、集まった会衆に弁明しようとした。<sup>34</sup> しかし、彼がユダヤ人だと分かると、みな一斉に声をあげ、「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス」と二時間ほど叫び続けた。

このアレクサンドロはユダヤ人で、信じていないユダヤ人でしょう。我々は、パウロたちと違うということを弁明しようとしたのでしょう、けれども、エペソの人たちには、区別がついていません。アルテミスを、唯一神を拝むユダヤ人は許せないとして、叫び続けたのです。

### 3C 常識的な調停 35-40

<sup>35a</sup> そこで、町の書記官が群衆を静めて言った。

町の書記官が出てきますが、静めるのに成功します。エペソの町の市長のような存在です。

<sup>35b</sup> 「エペソの皆さん。エペソの町が、偉大な女神アルテミスと、天から下ったご神体との守護者であることを知らない人が、だれかいるでしょうか。<sup>36</sup> これらのことは否定できないことですから、皆さんは静かにして、決して無謀なことをしてはなりません。

つまり、エペソのアルテミスがいかに偉大であるかは、その名声はこんなことでなくなるわけがない、不動の存在だということです。これは否定できない事実だから、アルテミスを守ろうとして無謀なことをしてはいけない、ということです。

<sup>37</sup> 皆さんは、この人たちをここに連れて来ましたが、彼らは神殿を汚した者でも、私たちの女神を冒瀆した者でもありません。

ガイオとアリストアルコは、神殿で破壊行為をしたわけでは全然ありません。

<sup>38</sup> ですから、もしデメテリオと仲間の職人たちが、だれかに対して苦情があるなら、裁判も開かれるし地方総督たちもいることですから、互いに訴え出たらよいのです。<sup>39</sup> もし、あなたがたがこれ以上何かを要求するのなら、正式な集会で解決してもらうことになります。

地方総督による裁判は、月に三度行われていたそうです。そこで訴え出たらよいということです。

<sup>40</sup> 今日の事件については、正当な理由がないのですから、騒乱罪に問われる恐れがあります。その点に関しては、私たちはこの騒動を弁護できません。」こう言って、その集まりを解散させた。

最後に、この騒ぎ自体が騒擾罪に問われる恐れがあると言っています。これで集まりを解散させました。きわめて、説得力のある言葉であり、書記官として成功したでしょう。けれども、20章がこのように始まるのです。「20:1 騒ぎが収まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ、マケドニアに向けて出発した。」騒ぎが収まるのが、パウロが別れを告げる理由になりました。

ここで、パウロがコリントの人たちに伝えていた伝道の接点というのを思い出してください。「Ⅱコリ 16:9 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています、反対者も大勢いるからです。」反対があるところで迫害は確かに受けますが、神が介入され、そこに神の栄光が現れました。ピリピで不当な扱いを受けましたが、そこで大地震があり、看守とその一家が信仰を持ちました。これまでひどい迫害を受けましたが、その反対の中で、確かにまことの神がおられると気付く者たちが現れました。今、市の書記官によって、アルテミスの威光は消えないと公認されました。それによって、みな安心して帰って行ったのです。事態は収まりましたが、福音とは全く異なる、世俗の世界に戻ったのです。霊的な接点をこの時に、パウロは失ったと思ったのでしょうか。危機の時には福音が輝きます。その危機には、神が生きておられるという証しがあるからです。世において光があり、光が輝けば、闇を愛する人は光に来ません。けれども、光に来る人がいるのです。神がそうされるからです。